

女性大腸がんサバイバーの就労に関連した体験

宮澤 芽生¹⁾ 磯見 智恵²⁾ 藤江 真世³⁾ 佐々木 茉衣⁴⁾ 酒井 彰久²⁾
福井大学医学部附属病院¹⁾ 福井大学医学部看護学科²⁾ 大阪国際がんセンター³⁾ 岐阜県総合医療センター⁴⁾

背景

大腸がんは働く世代で罹患が急増しており、大腸がんの治療や経過観察を行いつつも働く人は多いと推察される。大腸がん術後は排便コントロールが難しく、特に女性は周囲からの印象等を気遣うため、就労が困難な場合もあると考えられる。

目的

手術を受けた女性大腸がんサバイバーの就労に関連した体験を明らかにする。

結果

1. 対象者の特徴

対象者は8名、年齢は39～67歳（平均年齢55.22±11.21歳）であった。直腸がん5名、結腸・S状結腸がん、盲腸がん、家族性大腸腺腫症は各1名であった。5名は一時的ストマを造設し、4名は術後化学療法を実施した。病前の雇用形態は、自営業が2名、正規雇用が2名、非正規雇用が3名でがん診断後退職したのは全員非正規雇用者であった。

2. 女性大腸がんサバイバーの就労に関する体験<カテゴリー>

<就労継続の有無>

| サブカテゴリー | ラベル |
|------------------|--|
| 術後の見通しがつかず仕事を辞めた | 転移の事など、今後の見通しがつかず働く気力がなくなった 今後の見通しが立たず、仕事を辞めることしか思いつかなかった |
| 治療に専念するために退職した | 治療に専念するために仕事を辞めた |
| 病気とわかって仕事も辞めなかった | 収入がなくなると治療できないからやめる選択肢はなかった デスクワークなので、手術しても続けられると思った |

<一度退職したが復職を決断>

| | |
|--------------------|--|
| 生活や検査費用のために復職を決断した | 術後の検査費用や生活のために働かなくてはいけないと思った 失業保険の受給が終わり、検査で問題なかったので再就職を決めた |
| 体調や業務内容を考慮して復職した | 事前に見学と試用期間を利用して、業務やトイレの行きづらさがないか確認した |

<復職に向けた悩みと準備>

| | |
|-------------|---|
| 仕事復帰への悩み | 勤務中のトイレや食事をどうしていいかと悩んだ 9時から16時まで勤務できるか悩んだ |
| 通勤方法の変更 | 頻回な便意で従業員用バスでの通勤が困難になり、特例で自転車通勤を認めてもらった |
| 就業時間の調整 | 就業時間を術前より1時間短縮してもらった 昼食後に排便回数が多いので、昼までの勤務に調整してもらった |
| 体力をつけるための工夫 | ちよとずつ掃除する範囲を広げていった 食欲はなかったが栄養剤を飲んだ |

<仕事を継続するための工夫>

| | |
|-----------------|--|
| 受診日の調整 | 受診日は予め上司に伝えて休みをもらった |
| 業務内容の調整 | 復帰1か月間は身体の負担が少ない業務内容に調整してもらった |
| 抗がん薬の量の調整 | 抗がん薬による吐き気が辛く、先生に薬の量を減らしてもらった |
| 自営業なので自分で調整できる | 自営業なので、体調が悪くなった際はいつでも仕事を抜けることができるので楽だった |
| 同僚・顧客に病気のことを伝えた | 顧客に直接会い、病気のことを説明することで理解を得た 会社の全員に病気のことを伝えて、仕事を休むことへの理解を得た |
| 就労中に休憩をとった | 昼食後は多目的トイレにシートを敷いて20分ほど休んだ |

方法

研究デザイン：質的記述的研究

調査期間：2018年 10月～12月

対象者：A病院消化器外科外来に通院中の大腸がん術後の女性で、研究の同意が得られた人

調査方法：半構造化面接法

分析方法：質的帰納的分析

倫理的配慮

福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

<頻回な便意・排便・便漏れによる困難と対処>

| | |
|--------------------|--|
| 仕事での頻回な便意や排便 | 職場で頻繁に便意を感じた。トイレに時間がかかった ご飯を食べるとすぐにトイレに行きたくなった |
| 仕事での便漏れ | 仕事で気づかないうちにパウチからの便漏れがあって困った |
| 仕事優先による排便コントロールの乱れ | 仕事を立て込んでくると便意を我慢してしまい、便秘がちになった |
| ストマによる困難 | パウチを交換しても漏れることがストレスだった |
| 仕事の仕方を工夫した | 立って仕事をするとうる便が出るので、座って仕事をした 階段を上ると便が出るのでエレベーターを使った |
| 食事の調整 | 身体の調子を見ながら食べる量を増やしていった 乳製品や油っこいものは食べないようにした |
| 仕事の際はトイレの場所を確認 | 職場内でも違う場所に行くときは、トイレの場所を確認した 出先での仕事の際は事前にトイレの場所を確認した |
| 通勤中の便意に対処していた | 自動車通勤中にお腹が痛くなって途中のコンビニのトイレに行った 自動車での通勤中に便意があったときは肛門を占めて我慢した |

<職場の人の目が気になる>

| | |
|----------------------|---|
| 職場の人の目が気になる | 何度もトイレに行くことを周りの人がどう思っているのか気にした 抗がん薬の副作用である指先の色素沈着を周囲に気づかれなくなかった |
| 指先の色素沈着が気づかれなかった | 指先の色素沈着を気づかれぬように、爪をきれいにして指先の色素沈着が見えないように隠した |
| ガスや便の臭いを人に気づかれるのが嫌 | 顧客の前でストマから便の臭いがすることが嫌だった ストマの便漏れやガスが臭うのではないかといつも不安だった |
| ガスや便の臭いを人に気づかれぬための工夫 | 下着に便がつくので、常に生理用ナプキンを使っていた ナプキンに便がつくと匂うのですぐに交換した 常に換えの下着を持ち歩いた |

<仕事を継続するための周囲からのサポート>

| | |
|-----------------------|---|
| がんになっても働いている人を見て励まされた | 同じ職場の胃がん術後の人が元気に働いているのを見て励まされる 肺がんの友達も働いているし、自分も働けると思った |
| 職場に病気を理解してくれる人がいる | 自分の病気を理解してくれている人が職場にいるのは気が楽 がんで手術をした上司に無理せんほうがいいと言われた |
| 顧客に励まされた | 顧客に励まされたため元気に仕事を続けられた |
| 家族が支えてくれた | 頻回な排便や抗がん薬の副作用を抱えながら仕事をする中で辛かったときには家族が支えになった ストマが漏れると困るので、夫に手伝ってもらった |

<仕事に対する価値・喜び>

| | |
|-----------------|---|
| 仕事は生きがい | 体よりも、今までの積み重ねや仕事という元気の源を失うことを惜しんだ 入院中から仕事をやりたいと思っていた |
| 働くことの喜び | 働くことができてよかった、仕事が好き |
| 仕事をしている方が気がまぎれる | 家にいるとマイナスのことばかり考えるので、職場でいろんな人と関わる方が楽しい |

考察

<就労継続の有無の決断>には、術後の見通しの有無が影響しており、診断後早期から術後の見通しを持てるような支援が必要である。<職場の人の目が気になる>といった、抗がん薬の副作用である指先の色素沈着やストマからのガス臭など治療による身体的変化を周囲に感じ取られないかという不安や苦痛を抱えていた。ボディイメージの変化は、自分らしさ、女性らしさの喪失にも繋がり、QOLの低下に影響する。医療者は、

治療の副作用だけでなく、石鹸の選び方や料理、掃除の際の注意点など、日常的に行えるケアや効果的なアピランスケアを行うことが仕事の継続、再就職に必要なと考えられる。就労を継続できる理由として、<仕事を継続するための周囲からのサポート>がある。治療の副作用や排便・障害による辛さに直面した際に周囲からの励ましが心の支えとなり、仕事を継続していくうえで重要になっていくと考えられる。

結論

女性大腸がんサバイバーが就労を継続するためには術後の見通しを持つことやアピランスケア、周囲からの励ましが必要である。

本演題発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。

『語り合いの場』ががんサバイバーの前向きになる気持ちに与える影響

古村加奈、嶋田千夏、平岩優花（平成30年度卒業生）
指導教員：繁田里美・橋本容子

学生の卒業研究（抄録）です。
日本看護学会（鹿児島市）で発表しました。

【目的】

『語り合いの場』において交流やコミュニケーションががんサバイバーの前向きになる気持ちに与える影響について明らかにすることを目的とする。

【方法】

- 対象 がん患者会定例会、がん患者サロン、イベント交流会などに参加したがんサバイバー
- データ収集方法 アンケート用紙を作成し、多項目選択法を用いて回答を得た。対象者には、研究の趣旨、方法、倫理的配慮について口頭で説明を行い、無記名による調査の依頼を行った。
- データ分析方法 統計ソフトIBM SPSS ver23を使用し、記述統計、単純集計とカイ2乗検定を行った。有意水準は5%とした。

【結果】

- 対象者の概要 参加したがんサバイバーは54人で、平均年齢は62.7歳であった。がん患者会定例会は16人、サロンは7人、イベント交流会は31人の参加であった。
- 『語り合いの場』へ参加した後の気持ちの変化 「思いや考えを話せた」「話して気持ちが楽になった」「話を聞いて前向きな考えを持てた」「他の参加者が話を聞いてくれたと感じた」「語り合いの場に参加して満足した」と感じた人は90%以上を占めていた。
- 『語り合いの場』で得られた効果と次回の参加への期待 心の支えを得ることを期待して参加した人で参加後「同じような問題を抱えている人がいる」と感じた人は59.3%($p \leq 0.05$)で有意な関連がみられた。悩みを聞いてもらうことを期待して参加した人で「同じような問題を抱えている人がいる」と感じた人は87.5%($p \leq 0.01$)、「自分にはない考えが得られた」と答えた人は50%($p \leq 0.05$)と有意な関連がみられた(表1)。他者の話を聞いて、「悩んでいるのは一人ではない」と感じた人が、次回参加したい理由として「色々なことを話し合える」75.8%($p \leq 0.01$)、「参考になる話を聞きたい」42.4%($p \leq 0.05$)、「一人で悩んでいない」42.4%($p \leq 0.05$)であり、それぞれ有意な関連がみられた。

表1 参加への期待と参加後の気持ち

| 期待した効果 | 期待している人 | | | 期待していない人 | | |
|--------------------|---------|-------|----|----------|------|----|
| | 人数 | 割合 | p値 | 人数 | 割合 | p値 |
| 思いや考えを話せた | 49 | 90.7% | | 5 | 9.3% | |
| 話して気持ちが楽になった | 49 | 90.7% | | 5 | 9.3% | |
| 話を聞いて前向きな考えを持てた | 51 | 94.4% | | 3 | 5.6% | |
| 他の参加者が話を聞いてくれたと感じた | 50 | 92.6% | | 4 | 7.4% | |
| 語り合いの場に満足した | 49 | 90.7% | | 5 | 9.3% | |

表2 語り合いの場で得られた効果と次回の参加への期待

| 効果 | 得た効果がある人 | | | 得た効果がない人 | | |
|---------------|----------|-------|----|----------|-------|----|
| | 人数 | 割合 | p値 | 人数 | 割合 | p値 |
| 悩んでいる人がいる | 32 | 59.3% | | 22 | 40.7% | |
| 悩んでいる人がいる | 32 | 59.3% | | 22 | 40.7% | |
| 自分にはない考えが得られた | 27 | 50.0% | | 27 | 50.0% | |
| 自分にはない考えが得られた | 27 | 50.0% | | 27 | 50.0% | |
| 一人で悩んでいない | 23 | 42.6% | | 31 | 57.4% | |
| 一人で悩んでいない | 23 | 42.6% | | 31 | 57.4% | |

他者の話を聞いて「同じ問題を抱えている人がいる」と感じた人で次回参加したい理由として、「参考になる話を聞きたい」58.3%($p \leq 0.01$)、「色々な情報を得られる」66.7%($p \leq 0.05$)、「体験談が聞ける」70.8%($p \leq 0.05$)、「生活を前向きに考えられる」50.0%($p \leq 0.05$)、「一人で悩んでいない」58.3%($p \leq 0.01$)であり、それぞれ有意な関連がみられた(表2)。

【考察】

- 『語り合いの場』への参加が与える安心感 他者の話を聞いて「悩んでいるのは自分一人ではない」「同じような問題を抱えている人がいる」「一緒に頑張ろうと感じた」と回答した人が多かった。このことから、語り合いの場へ参加し、がんサバイバー同士が日ごろの思いを語り合うことで、生活のつらさや不安を共有できる機会になっており、孤独感の軽減につながっているといえる。
- 『語り合いの場』への参加が与える新しい発見 地域で日常生活をおくるがんサバイバーは、生活と折り合いをつけながら治療を継続している中、副作用の対処や、就労についての悩みなど、困難に感じていることや不安を抱えている。そのため、語り合いの場でがんサバイバー同士が交流することで、これまで自分にはなかった考えや知らなかった情報などを得ることができていると考えられる。
- 『語り合いの場』への参加における満足感 語り合いの場へは「交流、情報を得ること、役立つ情報を得ること」を期待するがんサバイバーが多く、参加後には「コミュニケーションの場、話し合える場」と感じている人が多かった。これらは普段感じている様々な困難を、他のがんサバイバーと語り合うことを求めていると考えられる。また、がんとともに生活するうえで疑問や不安に感じていること、必要な情報・アドバイスなどを、他のがんサバイバーから実際に経験してきた情報として得たいと感じているためではないだろうか。参加後90%以上の人が「語り合いの場に参加して満足した」と回答している。これは、参加前に求めていた期待通りの効果を得られていること、上記に述べたようにサバイバー同士で話すことで生じる安心感や他者から新しい考えを得ることが新しい発見につながり、これらが満足感になっていると考える。

【まとめ】

『語り合いの場』への参加は思いや考えを表出し、悩みや不安を共有できる場になっており、これが安心感を得ることにつながっていた。また、これまで自分にはなかった考えや情報を得ることで、悩みの解決や不安の軽減につながり、自分も頑張ろうと今後の生活を前向きに考えられる。医療者はそれぞれの語り合いの場において得られる効果や満足感を理解し、がんサバイバーが生き生きと生活できるように関わっていくことが重要である。



がん体験者の会「みのり会」を支援しています。

みのり会は、希望をもって生き生きとした“実り”ある生活をした、という思いを込めて、平成19年に設立されました。学生の教育や研究の機会にもなっています。



セラピードッグ
のラッキー